

## 動物実験とマスコミ

栗本雅司

岡山実験動物研究会会長

つい先頃お正月を祝い、桜の花を楽しみ、新緑の季節を迎えたばかりですが、この会報が出る頃はもう今年も半ばを過ぎ7月となります。将に「光陰矢の如し」を実感しておりますが、会員の諸先生方は時を忘れて研究に没頭されておられることと思います。

昨今、動物・動物実験を取り巻く環境が、「動物愛護と動物の権利・生存権」そして「科学・技術の発展と人類の福祉」にどのように関係し、位置付けられるのかという観点から益々厳しくなっており、一般紙にもしばしば動物に関する記事が見られるようになりました。今年5月の朝日新聞、山陽新聞から動物に関する記事を見てみる。

朝日5月4日には、アメリカのジェンザイム・トランスジェニック社がヤギの乳からヒトの血栓溶解用の医薬品「アンチトロンビン」を生産するため、ヤギ1000頭を飼育する遺伝子牧場を計画しているという。朝日5月5日では、イギリスのイムトラン社がブタの体にヒトの遺伝子を組み込み、ヒトの臓器移植に使えるブタを開発しているという。記事によれば動物保護グループの標的にされないよう警戒厳重で電話番号も秘密、所在地もケンブリッジから300マイル以内とかししか言えないという。

この記事を受けて早速5月23日付けの朝日の論壇に鹿児島大学・免疫学の杉村和久教授の「遺伝子変換動物と生態系」という投稿がでた。万が一これらの人工動物が生態系を乱すようなことがあった場合、人間はこの動物を全滅させるだろうが、人間にそんな権利があるのだろうか。ナチの虐殺からユダヤ人を救ったドイツ人を描いたスピルバーグの「シンドラーのリスト」とダブって見える。もっと慎重な論議と成熟した見識が必要ではないか、というものである。

朝日5月17日の論壇の投稿に本州産クマゲラ研

究会事務局長の藤井忠志氏の本州産クマゲラ等の保護に関して「動物保護に有効な緑の回廊」がある。明るい、楽しい話題では山陽5月23日に岡山県和気郡佐伯町の県自然保護センターで「タンチョウのひな2羽誕生、まだ4個がふ化中」の記事が見られる。

山陽5月29日には、五段抜で「捕鯨再開の道断つ、ミンククジラも禁漁」IWC総会で南極海の鯨のサンクチュアリ案が可決され、日本のミンク鯨捕獲も否決された旨の記事が踊っている。

このような中、昨年暮れの第26回研究会における特別講演は大変印象深いものであり、大きな意義があったと考えます。科学、特に医学・薬学の分野で動物実験は必須なのか、無くても良いのか、代替えが可能なのかということに関して考える良き材料を提供頂いたことです。

岡山大学医学部矢部教授の御講演によれば1950年代、少し足を引き摺り体を揺らして街を歩いている人達を見掛けた人は多い。殆どが小児マヒの後遺症であったという。サル腎組織培養で増殖させ不活化した最初のポリオウイルス・ワクチンとして有名なソーク・ワクチンの開発、更にサルを用いてヒトに無害なウイルス変異株の選別を行った結果、より無害なセービン・ワクチンの開発に成功し、今日ではまず小児マヒの後遺症の人を見る事はなくなった。ここでは無害ウイルス変異株の選別にサルは必須であった。人事を尽くしても動物実験は無くせないのではないかと。

一方岡山大学薬学部の田坂教授はヒスタミンの遊離に関する長年の研究の中で、動物実験の代りに例えばヒト細胞のHL-60などの使用が考えられるという。

会員諸先生方も時に一休みして、揺れ動くこれらの問題を考え、どこに行き着くのか、大きな流れを考えることも有意義なことだと思われま